

沈伯俊氏が語る「三国志」

——人物と創作方法——

中国文学科 伊藤晋太郎ゼミナール

二〇一五年九月十一日、中国の四川省社会科学院の沈伯俊研究員（研究員は教授に相当）が二松學舎大学を訪れ、文学部中国文学科の伊藤晋太郎ゼミナールの学生と学術交流を行なった。本稿は、沈伯俊氏が当日の交流において「三国志」の人物、および『三国志演義』の創作方法について、学生たちに語った内容をまとめたものである。

沈伯俊氏について紹介する。沈氏は、一九四六年の生まれ。籍貫（本籍）は安徽省廬江市（「三国志」の周瑜の出身地）だが、生まれ育ったのは重慶市である。「三国志」の研究を始めたのは一九八〇年代からであり、発表した論文や評論は百篇をゆうに超える。その中でも主要な業績は次の二点。一つは、『三国演義辞典』（譚良嘯氏との共編、巴蜀書社、一九八九年）を編纂したこと。歴史小説『三国志演義』に登場する人物・場面・地名・官職はもちろん、関連する他の作品、『三国志』にまつわる民間伝説や名勝古跡まで網羅している。立間祥介・岡崎由美・土屋文子訳『三国志演義大辞典』（潮出版社、一九九六年）は本辞典の日本語訳である。もう一つは、『校理本 三国演義』（江蘇古籍出版社、一九九二年）の刊行である。沈氏によれば、『三国志演義』には多くの「技術性錯誤」が存在するという。「技術性錯誤」とは、当時の執

筆環境や社会条件などによって生じた作者の意図とは関係のない作品中の誤りである。よって、読者が誤った認識を持ってしまわないように正しく直す必要があるという。「校理」というのは、「技術性錯誤」に対する訂正と、訂正の根拠についての説明を指す。沈氏は『三国志演義』に対して一千箇以上の校理を施した。沈氏はこれら二点の業績によって国内外で高い評価を得ている。

沈氏の今回の来日は、「三国志学会 第十回 京都大会」（九月五日、於龍谷大学）と「三国志学会 東京講演会」（九月十日、於早稲田大学）での講演が目的であったが、本ゼミを担当する伊藤が四川大学に留学していた時に沈氏から指導を受けていたご縁により、日本滞在中の本学訪問、および学生との交流が実現した次第である。

今回の学術交流の参加者は次の通り（敬称略。所属は当時）。

■講師 沈伯俊（中国・四川省社会科学院研究员）

■教員 伊藤晋太郎（二松學舎大学文学部准教授）

■学生 井上桃華・羽良柚亮・山本将好・柵屋幸明・大澤愛（以上、ゼミナールⅠ）

川島沙弥香・小池有希・坂本直仁・白岩司門・高井佳輝・高橋恵佑・北條総（以上、ゼミナールⅡ）

また、本ゼミの学生以外に、通訳として、王知叡（文学部国文学科四年）・熊謝子初（文学部中国文学科四年）・倉持リツコ（文学研究科科目等履修生）の三氏の協力も得られた（所属・学年は当時）。

一、「三国志」の人物について

交流会では、学生一人一人が自分の好きな「三国志」の人物、あるいは研究してみたい「三国志」の人物を挙げた。これに対し、沈伯俊氏は全員に丁寧かつ詳細なコメントを下された。以下、人物ごとに沈氏のコメントのうち主なものを紹

介する。

①鍾会

「鍾会は曹操の重臣である鍾繇の末っ子であり、曹魏の中期から後期にかけての重要な人物です。鍾会が好まれる理由としては二つが挙げられます。一つは、若くて颯爽としていたこと。彼が亡くなったのは数えて四十歳の時です。もう一つは、非常に聡明で能力があること。『世説新語』¹⁾には次のようなエピソードが見えます。このエピソードは『三国志演義』にも採用されています。鍾会（八歳）が兄の鍾毓（九歳）と魏の文帝曹丕にまみえた時、鍾毓は全身汗びっしょりでしたが、鍾会は全く汗をかいていませんでした。曹丕が鍾毓にどうして全身汗をかいているのかと尋ねると、鍾毓は緊張のあまり汗をかいているのですと答えました。一方、鍾会は緊張し過ぎて汗も出まないと答えました。このことで鍾会は曹丕に気に入られました。鍾会の聡明さが分かります。その後、鍾会は司馬昭の最も頼りになる謀士となりました。司馬昭も鍾会を「吾の子房（漢の高祖劉邦の謀臣張良）なり」と高く評価しました。二六三年、司馬昭が三方から蜀に攻め込んだ時、鍾会は主力軍を率いました。この時の主戦力は鍾会と鄧艾の二軍ですが、鄧艾が率いたのは三万、それに対し鍾会は十万でした。鄧艾の方がずっと年上なのにです。このことから司馬昭がいかに鍾会を重視していたかが分かります。若くて颯爽としており、非常に聡明で能力がある。女子学生が彼を好きになるのも理解できます。

しかし、注意しなければならないのは、鍾会には二つの欠点があることです。一つは、人柄がよくないこと。鍾会は「竹林の七賢」と呼ばれる知識人の一人である嵇康の面識を得ようとはしましたが、嵇康は鍾会が嫌いでした。嵇康は曹魏の外戚であり、鍾会は司馬昭の腹心です。嵇康は曹魏に忠誠を尽くしていたので、当時曹魏から権力を奪いつつあった司馬昭の腹心は嫌いでした。嵇康が鍾会を無視したため、鍾会はこれを恨み、司馬昭の前で嵇康の悪口を言いました。その

後、嵇康は処刑されますが、それは鍾会の讒言のせいでもあるのです。もう一つは、皆さんもよく知っているように、蜀を滅ぼした後、野心を抱いて反乱を起こし、失敗したことです。ゆえに我々は鍾会の聡明さと能力を重視すると同時に、人格上の問題点についても注意する必要があります。」

②馬超

「馬超は私も比較的好きな人物です。『三国志演義』の読者はみな馬超が好きでしょう。馬超が読者に好感を持たれる理由は主に二つあります。一つは、若くて颯爽としていること。小説（『三国志演義』）の中では「錦馬超」と呼ばれます。もう一つは、武芸に優れていること。小説の中では彼の優れた武芸を何度も強調しています。第一は「潼関の戦い」です。潼関では、曹操が目立つのを避けるために、自分のひげを切り、戦袍を脱ぎ捨てなければならぬほどに撃ち破っています。第二は許褚との一騎討ちです。第三は張飛との一騎討ちです。よって、馬超は当時におけるトップクラスの武勇の持ち主といえます。

ただし、蜀漢の勇将の中では特殊な点があります。張飛や趙雲と比べると悲劇性があるのです。彼が曹操に対して挙兵した時、父親の馬騰をはじめ、家族のほとんどを曹操に殺されました。潼関（陝西省潼関県東南）で最終的に曹操に敗れた後、馬超は張魯に身を寄せましたが、彼の妻と子供は張魯に殺されました。これが彼の悲劇性の第一の理由です。一族の二百人以上が殺害されているのです。第二の理由は、馬超は劉備の配下になるのが遅かったため、政権の中では高い地位にいたものの、本当の意味での特別待遇を受けられませんでした。ですから、劉備に帰順した後も彼の心は暗かったと思われれます。したがって、彼は人々に好かれると同時に、同情もされる英雄といえます。」

③ 諸葛亮（孔明）

「私は『三国志』の人物の中で孔明が一番好きです。おそらく『三国志演義』のほとんどの読者が一番好きなのは孔明でしょう。孔明についてお話しできることは特にたくさんあります。私はすでに多くの論文の中で孔明について述べてきました。孔明がみなに好かれる理由は、彼が『三国志演義』におけるナンバーワンの主役だからです。彼には多くの優秀な品格がありますが、重要なのは二点です。第一は、知恵です。孔明は知略に優れていて、誰も彼の相手になりません。小説の中には三人の一流の人物がいます。一人目は曹操です。曹操は孔明に対するたびに、「また孔明の罠にかかった」と心につぶやきます。二人目は周瑜です。周瑜は孔明と戦うたびに、「わしは孔明にかなわない」と言っています。三人目は司馬懿です。司馬懿も孔明と知略を闘わせるたびに、「わしは孔明にかなわない」と嘆息します。日本風にいえば「超一流」の三人がいずれも孔明にはお手上げであることから、孔明は知恵の化身であるといえます。第二は、忠実さです。その忠実さは、単に劉備に対して忠実であるというだけでなく、さらに重要なのは自分の理想に対して忠実であるということです。漢室復興という理想です。この二点が歴代の読者から敬服されているのです。これは日本人が孔明を好きな理由でもあります。知恵と忠実さは、我々がいつまでも必要とするものです。」

④ 周瑜・陸遜

『三国志演義』において呉に関する描写は多くありません。読者がよく知っている呉の人物は、孫策・孫権の兄弟を除けば、四人の司令官——周瑜・魯肅・呂蒙・陸遜でしょう。彼らはいずれも当時の一流の人材でした。総合的に見れば、この中で呉に対する貢献度が最も高かったのは、周瑜と陸遜です。周瑜に対して孫権は、「雄才大略」と評価しています。周瑜はまず孫策を助けて江東に地盤を築かせ、それから孫権を輔佐して政権を強固にさせました。孫権はずっと周瑜を兄

のように慕っていました。「赤壁の戦い」^②の際、周瑜は断固として曹操との決戦を主張しました。しかも、自ら軍隊を率いて曹操を撃ち破っています。これによって孫権も自分の地位を固めることができました。孫権は帝位に即いた時に、「わしは周公瑾（公瑾は周瑜の字）がいなかったら、帝位に即けなかった」と言っています。だから、孫権の周瑜に対する評価は最も高いといえるわけです。

四人の司令官の中で陸遜の最大の特徴は二点挙げられます。第一に、『三国志演義』の中盤から後半において、陸遜は呉における唯一の孔明に対抗できる人材だということです。第二に、文武双全にして、とても高い戦略眼を持っていたことです。後に彼は呉の丞相（宰相）になっています。位人臣を極めたわけです。ゆえに孫権は彼を非常に重んじました。孫権は、「周公瑾には誰も及ばない。ただ、陸遜だけは公瑾と同列に論じることができる」と言っています。しかし、私に言わせれば、陸遜の戦略眼は周瑜よりも優れていると思います。」

⑤曹操

「学术界では歴史上の曹操と『三国志演義』の曹操に対してはさまざまな見解があります。私の曹操に対する評価は二点にまとめることができます。第一に、曹操は後漢末から三国時代にかけての大英雄であるということ。彼は傑出した政治家、傑出した軍略家、傑出した文学者です。第二に、曹操は人に恐怖感を与える英雄であるということ。彼は非常に利己的であり、他人を疑い過ぎるから、彼と友達になるのは無理です。これが私の曹操に対する評価です。

「三国志」を題材にした映画やドラマにあっても、曹操は主要人物の一人です。『三国志演義』にしろ、テレビドラマにしろ、『レッドクリフ』^③のような映画にしろ、いずれも曹操のこの二面性を描いています。どちらかというと、映画における曹操は、監督が現代の観衆の好みに迎合するためなのでしょうが、俗っぽく描かれています。

例えば、『レッドクリフ』における小喬が曹操を訪ねるシーンです。小喬は、「あなたは私を手に入れるために南征してきたのですか」と問い、「これ以上戦争をしないで」と訴えます。そして、剣を抜いて自刎しようとさえします。曹操はその剣を奪い取って、「別鬧（おとなしくしろ）」と言います。このシーンには全く歴史的根拠はありません。なぜなら、江東の美女であり、周瑜の妻である小喬と、後漢末の太尉橋玄の娘とを混同しているからです。橋玄は一〇九年の生まれで、曹操よりも四十六歳年上です。したがって、橋玄に娘がいたとすれば、おそらく曹操より年上で、どんなに若くても曹操とほぼ同じ年齢でしょう。曹操は一五五年の生まれですから、「赤壁の戦い」のあった二〇八年には数えて五十四歳でした。だから、橋玄に娘がいて、しかも「赤壁の戦い」の時も存命だったとすれば、五、六十歳のおばあさんということになります。周瑜の若くて美しい奥さんの小喬とは全くの別人です。よって、『レッドクリフ』のこのシーンで曹操は「別鬧」と言っていますが、むしろ「胡鬧（デタラメ）」なのです。このシーンは歴史的根拠がないばかりか、曹操を貶めることになっています。曹操が大軍を率いて南征したのは、一人の美女を得るためではなく、天下を統一するためです。だから、このシーンはストーリー展開からいってもデタラメであり、キャラクター描写からいっても曹操という大英雄を貶めているといえるのです。」

⑥曹真

「曹真が好きとは独特な見方の持ち主ですね。多くの読者は曹魏の中後期の將軍についてはあまりよく知りません。しかし、あなたが曹真を好きなことにはうなずけます。魏の文帝曹丕は死に際して、四人の大臣——曹真・曹休・陳羣・司馬懿に後事を託しました。曹真・曹休は魏軍の司令官であり、陳羣・司馬懿は文官です。当時の曹魏は二方面と敵対していました。一つは曹魏の西南に位置する蜀漢であり、もう一つは曹魏の東南に位置する東呉です。明帝曹叡の在位中、曹魏

の軍隊の重要な司令官である曹真は関中（今の陝西省の渭河流域地区。四方を函谷関など四つの関所に囲まれていた）に駐屯して蜀漢に対処し、曹休は揚州に駐屯して東呉に対処していました。比べてみると、曹真の功績の方が曹休よりもずっと上です。孔明の「第一次北伐」⁽⁴⁾の時、曹魏方面の司令官は曹真でした。当時、司馬懿は荊州の南陽（河南省南陽市）に駐屯していました。ですから、『三国志演義』に見えるように、曹真が孔明に敗北した後で司馬懿が魏軍を率いたわけはありません。実際は、曹真とその武将の張郃が「街亭の戦い」⁽⁵⁾で馬謖を破ったのです。それによって蜀軍は撤退に追い込まれました。趙雲が率いていた部隊も曹真に撃ち破られています。つまり、曹真は孔明の「第一次北伐」時には勝利を得ているのです。しかも、曹真は冷静沈着で謙虚な司令官でした。部下を信任して重用することができるのも彼の長所の一つといえます。一方、曹休は「石亭の戦い」⁽⁶⁾で陸遜に大敗を喫し、率いていた十万の兵のうち、七、八万を失いました。曹休は恥ずかしさと後悔から、病を発して死んでしまいます。両者の比較から、曹真は曹丕と曹叅の時代における曹魏の最も優秀な司令官だったといえます。ですから、曹真に注目するとはなかなかのものなのです。

残念なのは、曹真の息子の曹爽があまりにも情けないことです。魏の明帝曹叅は臨終の際、曹爽と司馬懿に後事を託していますが、曹爽は平凡で無能でした。十年後、司馬懿にクーデターを起こされて、曹爽の一家全てが殺されました。これ以後、曹魏の大権は司馬懿の手に握られました。司馬懿がクーデターを起こした時、曹爽の謀士で知恵袋といわれた桓範は、「曹子丹（子丹は曹真の字）は立派な人物であったが、その子は豚のようにまぬけだ」と言っています。曹真は優秀な司令官でしたが、優秀な後継者を育てられなかったことは、残念なことです。」

⑦ 劉備

「劉備は数百年にわたって『三国志演義』の読者に好かれてきた人物です。『三国志演義』の劉備は中国文学史上、それ

までになかった明君のキャラクターであるといえます。『三国志演義』以後の小説においても彼に匹敵するような明君のキャラクターはいません。現代の学术界や読者の間では、劉備のキャラクターについての論争があります。彼らは主に劉備の一部の行為が偽善的であると批判していますが、実はそのように主張する人ほど真剣に『三国志演義』を読んでいないのです。どうしてみなが劉備を好きなのでしょう。それは根本的な二つの点において、『三国志演義』の劉備像が民衆の期待する明君像に合致しているからです。昔から民衆が抱いてきた明君像とは如何なるものでしょうか。一つは、民衆を愛することです。『三国志演義』において、劉備ほど民衆を愛する人物はいません。当陽長坂坡（湖北省当陽市東北）のエピソードを思い起こしてごらん下さい。十数万の民を引き連れ、一日に十数里しか進めない危険な状況でも民を見捨てませんでした。これはなかなかできることではありません。もう一つは、人材を愛することです。そのことは「三顧の礼」^⑧のエピソードからよく分かります。「三顧の礼」の時、孔明は現在の数え方で二十六歳でした。しかも、学歴はなく（孔明の学歴は皆さん以下です）、何の功績もなく、何の著作もありません。一方、劉備は天下に名を知られた大英雄です。しかも、劉備は孔明より二十歳年上です。劉備は自分を輔佐してもらうため、毎回百里以上の道のりも苦とせず孔明を訪ねました。以後、孔明を非常に信任して重用し、その信頼はずっと変わることはありませんでした。劉備が人材を大事にしたことは、今日でも多くの若者が憧れるところです。この民を愛し、人材を愛するという点から、劉備は読者にとって明君の鑑となりました。

では、歴史上の劉備はどうでしょうか。『三国志演義』に描かれる劉備の二つの長所は、歴史上の劉備にもあてはまります。したがって、歴史上の劉備も真の明君といえます。やはり、民と人材を愛したのです。ただ、歴史上の劉備は「梟雄」とも称されます。この梟雄が意味するところは、やや複雑です。勇猛・凶悪にして忍耐力があるということになりましょうか。歴史上の劉備は明君であり、また梟雄でもありました。梟雄の一面が分かる例を挙げましょう。「赤壁の戦い」

の時、劉備は四十八歳でしたが、それでも軍を率いて前線に出ていました。劉備と曹操が漢中（陝西省漢中市）をめぐる争った時、彼はもう五十八歳であり、戦況は緊迫していましたが、やはり前線に出て戦いました。だから、当時の人々は劉備を「老兵」と呼んだのです。よって、劉備は確かに梟雄といえます。しかし、『三国志演義』は主に劉備の明君としての一面を強調して、梟雄としての一面をほとんど描きません。まるで孔明に頼りっきりであるかのように描きます。戦いのたびに孔明が将兵を動かし、劉備は何も言わないか、「そのようにいたせ」と一言発するだけです。こう描かれることによって劉備の人物像は魅力を減じてしまいました。この点は『三国志演義』の劉備像の短所といえます。」

⑧ 孫策

「多くの読者は『三国志演義』を熟読していても、実際のところ、東呉の歴史についてはあまりよく知りません。東呉の天下は、実際には主に孫策によって築かれたものです。この点について『三国志演義』にはあまりはっきりと書かれていません。歴史上の孫堅（孫策の父）は呉郡富春県、今の浙江省杭州市富陽区の人です。しかし、官途については、ずっとよその土地で役人をしていました。董卓討伐の時には長沙太守でした。長沙（湖南省長沙市）は荊州に属します。一方、江東は揚州に属します。長沙太守であった時、彼は主に袁術を頼っていました。だから、『後漢書』では「袁術の将孫堅」と書かれています。したがって、当時彼は江東には全く地盤がありませんでした。

孫策は二十歳の時に袁術から独立し、自らの政権を打ち立てました。たった二、三年のうちに、彼は江東六郡、すなわち揚州の大部分を手に入れました。当時において最も早く勢力を拡大した英雄といえます。後に彼は狩獵中に襲われて命を落としました。これは全くの不慮の出来事で、享年二十五歳でした。しかし、二十歳から二十五歳までの数年間で広大な領土を手に入れたのですから、立派なことです。曹操でさえも、彼は獅子のように勇猛だと評しています。『三国志演

義』は彼を「小霸王」と称していますが、これは楚漢戦争で有名な項羽に似ているところがあるという意味です。項羽も三十歳という若さで死んでいます。しかも項羽は秦を滅ぼすのに大功を立てました。しかし、項羽と比べてみると、人材の活用という面においては孫策の方がずっと優れています。したがって、孫策は当時における非常に優秀な青年英雄といえます。」

⑨ 司馬懿

「司馬懿という人物は、「三国志」の後期の人物の中では非常に有名であり、曹魏において唯一、孔明に対抗できる人物といえます。彼は孔明より二歳年上です。彼は曹操の時代に出仕しましたが、内心では曹操を嫌っていました。無理やり配下に加えさせられたからです。結局、曹操の時代は重用されなかったものの、重要な局面で非凡な才能を発揮しています。まず、曹操が張魯を破って漢中を手に入れた時、司馬懿は劉曄と共に一気に巴蜀も攻め取るよう勧めました。漢中は巴蜀と隣り合っており、漢代には益州に属する一つの郡でした。惜しいことに曹操はその策を容れませんでした。これは恐るべき策です。もう一つは、二一九年に関羽が北上し、曹仁（曹操の従弟）を包囲した時です。関羽の勢力は瞬く間に拡大し、黄河中流域の武装勢力も関羽に呼応しました。曹操は大いに脅威を感じ、遷都して関羽の矛先を避けようとしたほどです。当時の都の許都（河南省許昌市）が曹仁の守る樊城（湖北省襄陽市）から近かったからです。司馬懿は遷都に反対しました。孫権を籠絡して関羽の背後を襲わせればよいと献策したのです。果たして孫権は曹操に籠絡されて、当時の総司令官であった呂蒙を派遣しました。結果、関羽は呂蒙に荊州を奪われ、敗北して命を落とすことになったのです。ですから、この時の司馬懿の策も恐るべきものだったといえます。司馬懿は曹操の配下の中で地位は高くありませんでしたが、重要な局面で恐るべき献策をしているのです。

曹丕が即位した後、司馬懿の地位は一気に高くなりました。執政大臣の一人となったのです。そして曹叡の時代には曹魏における第一級の人物となりました。先ほどもいったように、孔明に対抗できた唯一の存在です。だからこそ、曹叡は臨終に際して、政権を司馬懿と曹爽に託しました。十年後、司馬懿はクーデターを起こし、曹爽の一味を滅ぼしました。だから、司馬懿は曹魏の中後期における極めて重要な人物なのです。

しかし、彼も権力を握ってから曹操と同じ二つの側面を持つようになりました。優れた英雄としての一面と人に恐怖感を与える英雄としての一面です。ただ、曹操と比べると、彼の英雄としての側面は、才能・見識・気魄のどれを取っても曹操に及びません。一方、彼の残忍さは時に曹操以上でした。曹爽と共に十年間国事を預かりましたが、曹爽は自分の無能さを自覚して司馬懿を警戒していたものの、司馬懿を殺すことはしませんでした。一方、司馬懿は病が重くて今にも死にそうなふりをしつつ、ひとたび機会が訪れるや、一気にクーデターを起こしました。司馬懿は曹爽のもとに使者を派遣して、兵権さえ渡してくれば危害は加えないと言わせます。しかし、曹爽が兵権を引き渡すと、掌を返したように曹爽兄弟やその腹心、およびその一族数百人を皆殺しにしました。子供さえも見逃しませんでした。司馬懿がいかに凶悪残忍であるかが分かります。司馬懿の死後は長男の司馬師が皇帝を廃しており、司馬師の跡を継いだ弟の司馬昭に代って皇帝殺しまでしています。

司馬懿の恐ろしさを示すエピソードがさらに二つあります。一つは、司馬懿が「鷹視狼顧」だったことです。「鷹視」とは、鷹のような鋭い目を指し、「狼顧」とは、体はそのままに首だけ後ろに向けられるということです。恐ろしいでしょう。鷹のような目をした人が首だけ後ろに向けらるんですよ。さらに恐るべきは、司馬懿の玄孫で東晋の第二代皇帝である明帝司馬紹が、臣下の王導から司馬氏がどのようにして権力を得たのかを聞き、顔を寝台に伏せて、「もしそれが本当なら、国を長く保てるはずがない」と言ったことです。子孫ですら、司馬懿の残忍さに恐れをなしたのです。ですから、司

馬懿は曹操ほどの英雄ではありませんが、曹操よりも恐ろしい人物だといえるわけです。したがって、我々は司馬懿に注目してもいいし、司馬懿を研究してもいいけれども、司馬懿のような人物が本当に好きかどうかについてはじっくり考えた方がいいと思いますよ。」

⑩華佗

「華佗は『三国志演義』にはあまり出てきませんが、読者に深い印象を与える医者です。華佗が深い印象を与えるのは、正史『三国志』に華佗の伝記があるからではありません（きつと多くの人は正史の華佗の伝記を読んだことはないでしょう）。『三国志演義』における華佗が読者に興味と敬意を抱かせるからです。『三国志演義』には華佗の医療技術の高さを示すエピソードが主に三つあります。

一つ目は、孫権が十六歳の時のことです。ある県を守っていて武装勢力の襲撃に遭いました。周泰が危険を顧みず孫権を救いますが、全身に傷を負って、命が危うい状態となります。誰もが周泰はもう死ぬと思いました。この時、ある人が神医華佗を推薦します。孫権はすぐに華佗を招いて周泰の治療にあたらせました。すると、周泰はすぐに回復しました。誰もが死ぬと思っていた周泰が、華佗の治療で簡単に治ったことは、読者に深い印象を与えます。

二つ目は、関羽の傷を治す場面です。関羽は曹操が派遣した七軍を水攻めにし、樊城を包囲しますが、曹仁の放った毒矢を腕に受けてしまいます。腕は腫れ上がり、青龍偃月刀も持てなくなりました。誰もがこの腕はもう役に立たなくなつたと思ひ、養子の関平は撤退を言いました。しかし、関羽は聞き入れません。そんな時に華佗が自ら関羽のもとを訪れたのです。そして腕を切り開いて骨の毒を削り取る、あの有名な手術を行いました。術後、関羽の腕はすぐに自在に動かせるようになりました。しかし、このエピソードは虚構です。なぜなら、華佗は二〇八年に曹操に殺されているからで

す。一方、歴史上で関羽が骨の毒を削り取る手術を受けたのは二一九年です。十一年も開きがあります。しかし、多くの人は史実を知りませんから、華佗の医術は本当にすごいと思っっているわけです。

三つ目は、死期の迫った曹操が持病の頭痛を治療させるために華佗を呼ぶシーンです。華佗は鋭利な斧で頭を切って病根を取り除くことを提案します。現代の医療技術であれば、特に問題のない手術でしょう。しかし、曹操は頭を切ったら生きていられるわけがないと考え、華佗が自分を殺そうとしているのだと決めつけます。また、華佗が関羽の治療をしていることから、関羽の仇を討とうとしているのだと思ひ込み、ついに華佗を殺します。関羽の治療が虚構である以上、このエピソードも虚構であることはいうまでもありません。

これらのエピソードはいずれも華佗の非常に神秘的な医術についてのものです。古代は科学が発達していなかったため、常人の域を超えた華佗の医術は人々にとって非常に神秘的なものであり、それゆえに華佗に関する物語が生まれたのです。では、歴史上の華佗はどのように死んだのでしょうか。実は、華佗と曹操は同郷人です。いずれも今の安徽省亳州市の人です。曹操は華佗が優れた医者であることを知っていたので、権力を握ると自分のもとで働かせました。しかし、曹操のもとですと働いていると、故郷が恋しくなり、しばらく故郷に帰ることを願ひ出ました。そして二度と戻って来ませんでした。先ほど述べたように、曹操は人に恐怖感を与える英雄ですから、彼のもとで働くのは危険なことでもあるのです。曹操は迎えを寄こしますが、華佗は家族や自分の健康がすぐれないと言って応じません。しかし、曹操は容易にはだまされません。人を派遣して華佗が仮病をつかっていることを調べ上げました。曹操はついに華佗を捕らえて処刑しました。処刑の際、曹操の謀士である荀彧が、華佗の医術が優れていることを理由に思い止まるよう諫めています。しかし、曹操は過去の他の独裁者と同様に横暴で、優れた医者ならほかにもいると言って聞き入れませんでした。華佗を処刑して間もなく、曹操が最も愛していた息子の曹沖が重病にかかりました。でも、誰にもどうすることもできません。曹沖は病が悪

化して死にました。わずか十三歳でした。曹操が華佗を殺したことを後悔したのはいうまでもありません。しかし、これは曹操が自ら招いた悲劇です。歴史上の華佗について知りたいと思ったら、正史『三国志』方技伝を見て下さい。その最初に華佗の伝があります。」

二、『三国志演義』の創作方法——史実と虚構の関係

続いて、ゼミナールⅡに所属する学生一名が卒業研究の中間発表を行なった。そのテーマが『三国志演義』の創作方法に関わるものであったので、沈伯俊氏から『三国志演義』における史実と虚構の関係についての丁寧なレクチャーがあった。以下はそのエッセンスである。

「『三国志演義』が人物を描く時、どのような方法を用いているか、それは史実と虚構の関係の処理という点に尽きます。『三国志演義』における人物を描くためのエピソード、特に重要なエピソードには程度の差こそあれ虚構が含まれています。精彩を放つエピソードほど虚構が多く含まれます。百パーセント虚構である場合もあります。『三国志演義』がエピソードを作り上げるにあたっては、史書の内容に完全に束縛されるわけではありません。その方法を以下に挙げます。

一つ目の最もよく見られる方法は、「移花接木」、すなわちある人物の行ないを別の人物の行ないとしてしまうことです。その例としてよく挙げられるのが、「督郵を鞭打つ」⁽⁹⁾です。史書の記載では督郵を鞭打ったのは劉備ですが、『三国志演義』の中では張飛が督郵を鞭打っています。このように処理することの利点は、劉備を明君として描けることです。寛大で温厚な明君の劉備が勝手気ままに人を殴るはずがありません。もし彼に殴らせたなら彼を粗暴なキャラクターにしてしまいます。張飛は火のように激しい気性ですから、督郵を殴らせるのにぴったりです。こうすることで張飛のキャラクターが際

立ち、劉備の明君としてのキャラクターも守れるのです。

二つ目の方法は、「改造加工」です。歴史上、確かにあったことを小説で史実と大きく変えて描いたり、実際にあったことではないものの、そのように言い伝えられていることを小説の中で本当にあったことのように描いたりすることです。その最たる例が「空城の計」⁽¹⁰⁾です。「空城の計」は正史『三国志』諸葛亮伝の裴松之注に見えます。私は中国でよく注意喚起しているのですが、多くの学者は裴注に見える資料をすべて真実と考えています。でも、実際はそうではありません。裴注は他の古典に見える注と違います。多くの古典の注は説明、解釈ですが、裴注は主に異なる史料の識別と比較を行っています。正史『三国志』諸葛亮伝の裴注に、晋代の郭冲という人が述べた「空城の計」のエピソードが引かれています。「第一次北伐」の時、孔明は魏延に大軍を率いて先発させ、自分は後から合流するつもりでしたが、敵の司馬懿と遭遇してしまいました。この時、孔明の兵力は少なくて弱く、司馬懿は大軍を率いていました。どうしたらいいでしょうか。そこで孔明は「空城の計」を用いたというのです。裴松之はこの引用のすぐ後で、これは事実ではないと批判しています。どうして事実ではないといえるのでしょうか。孔明の「第一次北伐」の時、司馬懿はまだ河南にいました。孔明のいた陝西省の陽平は、司馬懿のいた河南とは遠く離れており、対陣することは全く不可能だからです。しかし、羅貫中は、確かにこれは史実ではないけれども、素晴らしい小説の材料だと考えました。そしてとても精彩を放つエピソードを書き上げたのです。これが「改造加工」です。

三つ目は「合理延伸」です。「合理延伸」とは、史書の中に記載はあっても、どうしてそうなったのかまでは記されていない場合、物語上の要請に基づき、また、読者の心理に基づき、作者がそれを気ままに作り出すことです。例を挙げましょう。「赤壁の戦い」の一番の鍵は何か。それは黄蓋の偽りの降服です。黄蓋が曹操に偽りの降服を申し出たことは史書に記されていますが、黄蓋がどのように曹操と連絡を取ったのか、また、曹操がどうしてそれを信用したのかについて

は記されていません。読者はこれらについて疑問を持つでしょう。そこで作者は二つのエピソードを作り出しました。その一つは「苦肉の計」⁽¹¹⁾、もう一つは「闕沢、偽りの降服文書を届ける」⁽¹²⁾です。さらに読者は、赤壁（湖北省赤壁市）で火攻めをかけられた時、どうして曹操軍の船は全滅を避けるために分散しなかったのかということにも疑問を抱くでしょう。そこで生み出されたのが「龐統、巧みに連環の計を授ける」⁽¹³⁾というエピソードです。これらはいずれも物語上の要請、読者の心理的要請に応えるエピソードです。これらによって読者はリアルさを感じることができ、物語も精彩を放つことになるのです。

四つ目は「踵事増華」です。「踵事増華」とは、史書には簡潔にしか記されていないことを小説で発展させ、精彩を放つ物語に仕立てることです。際立った例は「三顧の礼」です。「三顧の礼」は史書では、「劉備はそこで孔明のもとを訪れたが、三回通って、やっと会えた」と、非常に簡単にしか記されていません。では、この「三回」の具体的な過程はどうだったのでしょうか。小説では、一回目、孔明に会えなかった劉備は、帰る途中で孔明の親友の崔州平に会います。二回目は、孔明の廬に向かう途中で、やはり孔明の親友の孟公威と石広元に出会います。孔明の廬には弟の諸葛均しかおらず、劉備がっかりして帰る時に孔明の岳父の黄承彦と会います。このように描く目的は何でしょうか。毛宗崗も評していますが、孔明の友人たちはいずれも立派であり、弟はあか抜けていて、岳父は風格があります。彼らでもこれだけ立派なのだから、孔明はもっと立派な人物に違いないと読者の期待を否が応でも高めるしかけになっているのです。しかも、三回目にしようやく孔明が在宅であっても、劉備はすぐには孔明に会えません。孔明は昼寝をしており、劉備は外で孔明の目覚めを待ちます。孔明は目が覚めても、まず詩を吟じ、さらに衣服を着替えてからようやく劉備と対面します。これらはいずれも史書には記載されていません。よって、「三顧の礼」の過程というのは、完全に『三国志演義』が作り上げたものなのです。これが「踵事増華」です。

五つ目は「憑空虚構」です。「憑空虚構」とは、史書に全く記載がないことを小説が必要に応じて作り出すことです。例としては「曹操、董卓を刺さんとす」が挙げられます。このエピソードはとても有名ですが、完全に虚構です。正史『三国志』武帝紀によれば、董卓は曹操を驍騎校尉に任命し、彼と諸事を相談しようとした。彼を味方に抱き込もうとしたのです。しかし、曹操は董卓と悪事を働きたくなかったため、こっそりと自らの故郷に逃げ去りました。この間、董卓と衝突するようなことは何もありませんでした。ましてや董卓を刺殺しようとするなんてことは。史書の記載は非常にあっさりしています。一方、小説『三国志演義』では、董卓は入京後、少帝を廢して献帝を立て、宮女を犯して無辜の民を殺したため、誰もが彼を恨み、また恐れてもいましたが、どうすることもできませんでした。ただ曹操だけが董卓を刺し殺そうと立ち上がります。ただし、曹操は張飛と違い、機知に富む人物です。彼はこのために七宝刀を借りました。何のためでしょう。もしチャンスに恵まれなかった場合、刀を献上するということを目にできるからです。董卓は背がとても高く、腕力もあります。対して、曹操は背が低く、史書に記載はありませんが、小説では七尺、つまり一六一センチメートル位となっています。私の背より少し高いに過ぎません。曹操にとって董卓を刺すことは難しいことなのです。果たして曹操が董卓を刺し殺そうとしたらちょうどその時、董卓に刀を抜く動作を見られてしまったため、曹操はすぐに、「よい刀を手に入れたので献上いたします」と言って、その場を去りました。このように描くことで、大義に徹し、天下のために害を除く勇氣の持ち主であることと、非常に機知に富み、機を見て事をなせることが表現されています。でも、このエピソードは史書に見えない虚構です。

六つ目は「顛倒史実」です。これは先に起きた事件を後に、後に起きた事件を先に置くことです。例としては『三国志演義』第五十七回の「潼関の戦い」が挙げられます。马超の父親の馬騰は、曹操を殺そうとして反対に曹操に殺されました。马超は曹操を討って父の仇を取ろうと挙兵します。ところが、史書の記載によれば、先に马超が曹操に対して反乱を

起こしたため、朝廷で官職についていた父の馬騰が曹操に殺されたのです。事件の前後が入れ替わっているでしょう。このように操作したのは、曹操に抵抗する馬超の正義感を表現するためです。もし史書のように描けば、馬超は曹操に反抗したことで父親を殺したことになります、とても軽率な人物になってしまいます。だから、事件の前後関係を入れ替えて馬超の正義感を強調したのです。

以上のように、羅貫中は『三国志演義』を書く中で、史実と虚構の関係を処理するいくつかの方法を用いているわけですが、その目的はいずれの場合もすばらしい物語や人物像を作るためなのです。」

以上をもって時間となり、沈伯俊氏と文学部中国文学科伊藤晋太郎ゼミナールの学生との学術交流会は終了した。日本の大学で学ぶ学部生にとって、その分野の研究における中国の第一人者と接する機会はなかなかない。今回の学術交流で学生それぞれが各自の今後の研究に資する収穫を得ることができ、大変貴重な経験になった。本学を訪問して学生たちにとってこのような機会を与えて下さった沈伯俊氏に心から御礼申し上げます。また、長時間にわたったこの学術交流は、通訳として参加を志願してくれた王知叡氏・熊謝子初氏・倉持リツコ氏の協力がなければ成り立たなかった。三氏にも厚く御礼申し上げます。

〔註〕

(1) 人物の言行を集成した志人小説の代表作。南朝宋の臨川王劉義慶のサロンで編纂された。三、四世紀の動乱期に生きた知識人の知恵、鋭い感覚、さわやかな人間関係などを描く。

(2) 西暦二〇八年に起きた曹操軍二十万と孫権・劉備連合軍五万との戦い。孫・劉連合軍が火攻めを用い、数で圧倒する曹操軍に勝利した。この結果、曹操の天下統一は不可能となり、歴史は三国鼎立へと大きく舵を切る。

(3) ジョン・ウー監督。アメリカ・中国・日本・台湾・韓国製作。日本ではPart Iが二〇〇八年に、Part IIが二〇〇九年にそれぞれ公開された。

(4) 孔明は蜀漢の国是である漢室復興のため、数度にわたって魏に攻め込んだ。これを「北伐」という。「第一次北伐」は西暦二二八年の最初の北伐。蜀軍は当初、有利に戦を進めたが、「街亭の戦い」での敗北により撤退を余儀なくされた。

(5) 「第一次北伐」中の戦。孔明は街亭(甘肃省莊浪県東南)という要衝の地の守備に馬謖を派遣する。しかし、馬謖は孔明の指示を無視して高台に布陣したため、水源を断たれて敗れた。孔明は「泣いて馬謖を斬る」とともに、自らの地位も降格させて責任の所在を明らかにした。

(6) 西暦二二八年に起きた魏と呉の戦い。呉の周魴の偽りの降服を信じた魏の曹休が、誘われるままに呉に侵入し、呉の陸遜に石亭(安徽省潜山県北)で撃破された。

(7) いわゆる「長坂坡の戦い」。曹操が荊州に攻め込み、荊州の長官劉琮は降服した。荊州にいた劉備は曹操に抵抗すべく、重要拠点の江陵(湖北省荊州市)を目指して後退するが、劉備を慕う人民十数万が後に随ったため、進軍はままならなかった。遂に当陽長坂坡で曹操軍に追いつかれ、劉備は妻子も見捨てて逃げざるを得なくなる。劉備の妻子は趙雲によって保護され、曹操の大軍も張飛の活躍によって何とか防ぐことができた。

(8) 劉備が孔明に会うために、自ら孔明の草庵を三度訪れたエピソード。孔明は立場も年齢も上の劉備が礼を尽くしてくれたことに応えて出仕することを承諾する。この時、孔明が劉備に提案したのが「天下三分の計」。

(9) 『三国志演義』では次のように描く。劉備が「黄巾の乱」平定の功で安喜県(河北省定州市東)の尉(治安担当)になった時、横暴な督郵(監察官)が派遣されてきた。怒った張飛が督郵を鞭打ち、劉備は官位を捨てて去った。

(10) 『三国志演義』では次のように描く。「街亭の戦い」の後、西城で撤退の指揮を執っていた孔明に司馬懿率いる大軍が迫る。あいに城内に兵は少なく、諸官は色を失ったが、孔明は城門を開け放ち、自らは楼上で琴を弾く。その様子を見て不審に思った司馬懿は、孔明の計略にかかるのを恐れ、馬首を返して引き揚げていった。

(11) 『三国志演義』では次のように描く。黄蓋が降服を装って曹操の船団に近づき火を放つことに決まったが、降服が本当だと曹操に信じ込ませるため、黄蓋はわざと諸将の前で周瑜に逆らい、周瑜は黄蓋を棒打ちの計に処す。このことは孫権軍に潜入していた間者によって曹操に知らされ、曹操は黄蓋の降服を信じることになる。

(12) 『三国志演義』では次のように描く。黄蓋の意を受けた闕沢は、黄蓋の降服文書を持って曹操を訪ねる。曹操は偽りの降服ではないかと疑うが、闕沢は三寸不爛の舌によってこれを信じ込ませる。

(13) 『三国志演義』では次のように描く。曹操の船団がばらばらでは火攻めは成功しない。そこで周瑜の意を受けた龐統が曹操に對して、船同士を鎖でつなげば揺れがなくなり、兵士の船酔いを防げると進言する。曹操はこの提案を採用する。